

書 評

加藤晴美 著

『遊廓と地域社会—貸座敷・娼妓・遊客の視点から』

清文堂 2021年3月 290頁 6,800円+税

過去の事象を綿密に復元し、丁寧に重ね合わせていく地道な作業があつてはじめて、過去の人びとは、立体的な歴史像の中で喜怒哀楽を表現しながら生き生きと躍動することができる。本書はその実践の書である。

「遊廓」といえば、私たちはまず、その「非日常性」に目を向けがちである。例えばそれは、絢爛豪華、煌びやかで艶めかしい「異世界」、あるいは人間の「生」が露出する場であるがゆえに隠された「裏世界」と言い換えることもできよう。

しかし、「遊廓」とは本当にそのような空間なのだろうか、と著者はこれまで「遊廓」に向けられてきた眼差しそのものを正面から問い直す。遊廓とは『『悪所』として単純化することのできない、多面性をもった空間なのではないか(266頁)』、という一文に、その問いは明示されている。

最も重要な本書のオリジナリティは、遊廓という「非日常」を地域社会という「日常」と陸続きの世界として見ようとした点にある。ではなぜ、著者はそのような着想を得ることができたのだろうか。著者は「あとがき」で次のように述べている。「遊廓についての調査を行うことに対する不安があつた。準備の一環として読んだ森光子(娼妓「春駒」)の日記『光明に芽ぐむ日』は衝撃的であつたし、やはり地域のなかで遊廓について尋ねることはよく思われないのではないかと考えていた」。逡巡する著者の背中を押したのは、各地の調査で出会った史資料や、遊廓について語って聞かせてくれる人びとであつた。

これに関して、再び著者の言葉を引用しよう。「遊廓という空間が差別と搾取にいろどられた側面をもつことは事実であり」と認識する一方で、「私はかつての地域のなかに『にぎわい』の象徴としての遊廓があり、遊廓とともに生きる人びとが存在していたこと、そしてそれを地域の歴史として大切に継承していこうとする人びとがいることも知つた」。「遊廓」と「地域社会」を交差させ

て描くという着想は、そうした史資料と人びととの出会いから生まれたものにほかならなかつたのである。

地域社会の日常という視点から遊廓を見ると、これまで交差することのなかつた「売買春をめぐる女性史研究」と「遊廓の社会構造的な研究」の両者が共鳴し始める。そしてその交差の中で、読者はあらためて「遊廓」とは何か、人びとは「遊廓」といかに生きたかを考える視座を得ることができる。強い主張で先導することはせず、淡々とした事実の積み重ねがむしろ、読者をリアリティある世界に引き込み、考える余地を残しているところが本書の魅力でもある。まずその全貌を目次によって示しておきたい。

第I章 序論

研究の目的と先行研究の課題／研究の視点と方法

第II章 近世・近代における遊廓の史的展開

近世期における遊廓の分布と類型／近代移行期における遊廓の展開／大正期における遊廓の展開／近代遊廓の成立と景観の特徴

第III章 明治前期米沢における遊廓の形成と貸座敷の存立

本章の視点と研究対象地域の概要／米沢における遊廓の形成と貸座敷業／貸座敷東楼の経営と遊興／東楼における芸娼妓の存在形態／小括

第IV章 大正期烏山における遊廓の展開と遊客・娼妓の存在形態

本章の視点と研究対象地域の概要／明治初期における遊廓の創出／旭遊廓の解説とその展開／貸座敷福二楼における遊客の存在形態／福二楼における遊興と娼妓の存在形態／小括

第V章 軍港都市横須賀における遊廓の形成と開発者

本章の視点と研究対象地域の概要／幕末期から明治初期における遊廓の創設過程／大滝遊廓の景観と貸座敷・芸娼妓の存在形態／明治中期以降の市街地拡大と遊廓移転／小括

第VI章 地方都市における近代遊廓の展開とその

特質

近代における地方都市遊廓の史的展開／明治前期における遊廓の展開と立地／地方都市における近代遊廓の成立／近代地方都市における遊客・娼妓の存在形態とその変化／地方都市における近代遊廓の成立とその特質

補論 大崎下島御手洗における遊廓の景観と地域社会—ベッピンとオチョロ舟の生活史

本章の視点と研究対象地域の概要／御手洗における売春業の史的展開／ベッピンの暮らしと地域社会／小括

第七章 結論

総括／地方都市における近代遊廓の成立過程とその特質／今後の課題と展望

冒頭の第二章では、近世・近代を通して遊廓が全国各地でどのように展開したのかを、番付、図誌、府県統計書、警察統計、地図等、様々な史資料をつなぎ合わせて明らかにしている。とりわけ東北・関東地方における近世後期の「遊所」の分布、大正期の「遊廓」の分布を示した2つの地図は貴重な労作である。

この図を見ると、「遊所」と「遊廓」が分布する場所は、いずれも交通の要所や産物の集散地としての都市であることがわかる。近世の「遊所」は湊・宿場・温泉場のいずれかに属しており、旅や移動にまつわる地域に存立していた。一方、近代になると、廃藩置県や宿駅制の廃止により、旧城下町や宿場町が地域振興を模索して「遊廓」を創設する場合もあれば、軍隊が立地する都市、炭坑など新たな資源開発が始まった地域に遊廓が続々と誕生した事例もあった。

時代とともに都市の役割や分布、ネットワークのあり方が変われば、「遊廓」の分布も変わる。近世後期と大正期を比べた時の分布の変化はそのまま、地域社会の変化といってよい。登場する都市はいずれも、これまで日本近代史、経済史、都市史などで取り上げられてきた地域ばかりである。つまり、既往の近世・近代史研究をもう一方から見直すことができる、合わせ鏡のような存在として「遊所」、「遊廓」はあるのだと分かる。

とするならば、ほとんどの都市に付帯していたこの「遊廓」という空間とそこに生きる人びとを、私たちは長らく見えないものとしたまま、都

市や近代を論じてきたことになりはしないか。筆者自身、都市に集まる人びとの「胃袋」に着目し、「飲食の場」から近代を再考したことがあるが¹⁾、本書を通して、それでもなお大きな見落としがあったことを痛感せざるを得なかった。

第三章から第五章、つまり、本書の中心で取り上げられるのは「近代地方都市」における遊廓である。近代において、「遊廓」と地域社会の関係を見るためには、都市構造の変化や新産業の勃興が著しかった地方都市こそ好適である、という見立てによって、具体的には、山形県米沢、栃木県烏山、神奈川県横須賀が本論で取り上げられ、補論として広島県の大崎下島御手洗の事例が加えられている。

第三章は著者が「研究者としてのモチベーションを取り戻すきっかけ(266頁)」となった、米沢川井小路町東楼に関する文書群を分析した成果である。史料との出会いは得てしてある運命的な意味を帯びることがある。史料が人を待っているように思えることもあるが、まさに本章はそうした文書と研究者との出会いの意味が凝縮された章といえよう。

本章では米沢における遊廓の立地や娼妓数の解明はもとより、これまで明らかにばされてこなかった遊廓の内幕が丁寧に描かれる。例えば「入金控」から明治15年における東楼の収入と客数が、「遊客人名簿」から遊客が具体的にどこから足を運んでいたのかが復元される。経営文書から知り得たのは、近代の遊廓の創業は、進取の気性をもつ新興経営者らの誕生によって果たされ、貸座敷を廃業した後も、洋食店や牛肉料理店など近代の都市を特徴づける新しい業種へと転業していく過程であった。

それだけではない。本章では、個々の芸娼妓の在籍期間、経歴、どのような経緯で芸娼妓となったのか、東楼の経営文書や手紙を通して解明される。個々の娼妓の人生にまで踏み込んだ鮮やかな分析には迫力がある。「決して包括的とは言えない種々の史料をつなぎあわせる」ことによって、「それまでどこか『記号』のようにとらえていた娼妓が、一人の女性としてはっきり浮かびあがってきた」と著者自身が言うように、この章は本書の白眉ともいえる論考となっている。

続く第四章は、大正期の烏山を事例として、第

Ⅲ章と同じく近代移行期に貸座敷業を商機ととらえてこれに参入していく住民の姿を描いている。鳥山は近世には和紙、近代には煙草の集散地として栄えた都市である。鳥観図や写真により、遊廓の内部を復元することと合わせて、地域社会における遊廓の位置づけを論じているところが重要である。写真には「男性客のみならず、娼妓ではない一般女性や子どもの姿も散見される」とあり、相撲見物、餅撒き、花火、花見、七夕など、様々な行事を通して地域の人びとにとってはイベントを楽しむ場ともなっていたことを著者は見逃していない。遊廓が「多面性をもった空間」であるという著者の主張は、こうした一つひとつの史実の確認のうえに成り立っているのである。

本章では、Ⅲ章で明らかにしえなかった、遊客と遊興のありかた、そして娼妓の存在形態との関係が解明される。ここでは特に、「誘客人名控簿」から各娼妓が1カ月に日々どれだけの客の相手をしたかを復元した表が目を引き。一見すると、淡々とした無味乾燥な数字の羅列のように見える。しかし、これらの数字から、著者が娼妓の稼働率を上げるための「廻し」と呼ばれる仕組みを読み取っていることが重要である。さらにはその仕組みが導入される背景に、遊客に占める都市労働者の割合が増加し、客単価が下がったがゆえに、経営を維持することが求められた状況があったことにまで考察は及んでいる。

考察の深さには研究対象に向き合う研究者の姿勢とセンスが如実に現れるが、私は特にⅢ章、Ⅳ章を読みながら、かつて著者と千葉県銚子市のフィールドを歩いた時の風景を思い出していた。本書のⅡ章で触れられている「松岸」というある集落の墓地を歩きながら、著者がこの地で亡くなった芸娼妓たちの墓を教えてくれたことがある。地元の寺の過去帳に、彼女たちの生きた証を探し求めていたことも知った。こうしたフィールドでの経験が、本書の考察の一つひとつに反映されているのだと思えたのである。

第Ⅴ章では舞台を横須賀に移し、以上までの章で明らかにできなかった、経営者の経歴と貸座敷業への参入に至る具体的プロセスを検討している。製鉄所建設を契機とする開発の動きに地元有力者らが参画して遊廓開発が進んだこの地域では、それら一連の文書が残された。

本章で用いられる「遊廓開発」という言葉にも表れているように、横須賀における新たな産業の勃興、外国人技術者の移入、陸軍練兵所の立地などと連動しながら、この地の遊廓は展開した。地元有数の有力者であった永嶋家の経営分析では、遊廓開発と土地経営のあり方が当家の経営の基盤となり、それは「都市形成への機運を敏感に感じ取り、対応していこうとする地域社会のあり方を象徴するものであった(167頁)」と説明されている。これはおそらく、横須賀だけの動向ではないだろう。近代日本の新開地で、同様の動きがあったものと想像される。

また、失火を契機として移転が求められた経緯の中では、明治中期以降の市街地拡大の影響もあり、「市中の風紀を乱す」ものとして、行政側に認識されるようになったことも明らかにされている。物理的にみれば、単なる「移転」であっても、その背景には拡大する都市の状況と住民の意識などが相まって「隔離」と「囲い込み」がなされたという指摘は重要である。売春を「賤業」とみなし、遊廓を「悪所」とする価値観の定着は、その後「遊廓」がどのような空間であるか、という今日にも続くイメージ形成の端緒のようにも思えるからである。

以上を総括して、第Ⅵ章では近代地方都市における遊廓の展開とその特質が論じられる。本書が取り上げた事例地域はいずれも、近世後期まで本格的な遊所をもたず、幕末期以降に新たに展開を見た地域であった。

全体として見れば、明治5年の「芸娼妓解放令」以降、地域内部における売春の空間は限定され、「貸座敷」と名称を変えて一元化された。その後、明治30年代前半には法的に「近代公娼制度」が確立し、遊廓の移転や新設が相次いだ。集娼化を特徴とする近代遊廓が多く、地方都市に形成されたことは、こうした政策の変化だけでなく、地域社会においては空間的な変化をともなって実体化したのだと著者は主張する。その実体化は国家と府・県と地方都市という3つのスケールで具体的にどのように進んだのか、第Ⅰ期(幕末維新期)、第Ⅱ期(明治初期～中期)、第Ⅲ期(明治後期以降)と時代区分を設け、段階的に説明される。このプロセスや担い手に、各地の特徴が表れていた。

立地に着目してみると、第Ⅲ期における集娼化と市街地からの隔離が進むことが共通しているが、それ以前の遊廓の立地には、都市内部に広く散在するパターン（米沢）や、都市内部の一定の地域に集積しているパターン（烏山）などの違いがみられた。

これまで「遊廓」を「地域社会」から切り離されて分析してきたがゆえに見えなかった「地域開発」と貸座敷業の導入経緯の関係も、本書を通じて新たに提示された知見だといえる。ここから見えてきたのは、近代における地域社会の新たな産業勃興や開発の経緯が様々であるがゆえに、遊廓が立地する背景や経緯は各地の社会経済状況と無関係ではなかったということである。考えてみれば、これは至極当然のこのように思えるが、「遊廓」と「地域社会」の双方から見ではじめて解明し得た課題であったといえよう。

本書のオリジナリティは近代遊廓の「形態論的な側面」と合わせて、遊客や娼妓の「存在形態」を明らかにしたことにあった。第Ⅰ期から第Ⅲ期までを通時的に見渡し、また三つの事例地域の違いを比較すると、各地の産業構造の違い、旅を背景とした売春から都市住民、さらに村落住民へと遊客層が拡大したことが示唆された。娼妓の労働負担は第Ⅰ期から第Ⅲ期へと移行するに従って増加し、彼女たちは経済活動などで地域間交流のある遠隔地域出身者である場合もあった。

以上を総括して、最後に著者が「近代遊廓」の特質として挙げた要点は下記の通りである。①近代公娼制度の展開の中で成立し、普及したものの、②近世期における高級かつ華やかな遊興をモデルとした空間を構築しながらも、③実際には近代と通じて著しく大衆化した性売買の空間として、さまざまな矛盾の中で機能した空間。

詳細な事例調査、史資料の分析を通じて新しい解釈を提示しつつ、その内実を生き生きと描いていただけに、個人的には総括をやや急ぎ過ぎているようにも感じられた。第Ⅵ章と第Ⅶ章にいくつかが重複がみられるため、個々の地域の差異とその意味を論じるよりも、一般化が強調されたこともその要因かもしれない。

都市の形態論的な議論はある程度の一般化が可能であるとしても、本書の肝ともいえる「遊客と

娼妓の存在形態」、そして「地域社会との関係」については、本論での踏み込んだ分析を活かした、地域比較による一般化とは別の総括もあり得るのではないだろうか。というのも、本書は近世からの連続性のない事例が中心であったが、補論では近世からの連続性を持つ、また別の論理展開が見える遊廓と地域社会のあり方が論じられているからである。著者自身も課題として挙げているように、歴史的な背景の違い、規模の違いを含め、一般化の一步手前で未だ明らかにされていない人びとの存在形態が、著者の分析を待っているように思える。

最後にさらなる研究深化への期待を込めて、1点だけ指摘しておきたい。近年の歴史学では、ミッシェル・フーコーが提示した「生政治²⁾」という概念をもとに、「身体」をめぐる様々な議論が展開し始めている³⁾。明治5年の「芸娼妓解放令」、明治33年の「娼妓取締規則」、内務省警保局による「貸座敷免許地標準内規」はまさに、「生政治」に関わる出来事であるように思われる。「近代遊廓は、近代公娼制度を設けて近代国家が性売買を管理・統制するために設けた『性の管理』・『身体の管理』のための空間であった(210頁)」と著者は明言している。したがって、著者の視野に「生政治」に関する昨今の新しい議論が加わるとすれば、今後、遊廓と地域社会に関する研究は、地理学と歴史学、政治学などを架橋する研究へと発展していく可能性が大いにあるといえる。

これはむしろ、胃袋から地域社会の歴史を考えてみたいと思う評者自身の課題でもある。

(湯澤規子)

【注】

- 1) 湯澤規子『胃袋の近代—食と人びとの日常史』名古屋大学出版会、2018。
- 2) ミッシェル・フーコー「社会医学の誕生」小倉孝誠訳『ミッシェル・フーコー思考集成VI 1976-1977年 セクシュアリティ 真理』筑摩書房、2000、280頁。
- 3) 例えば、服部伸編『身体と環境をめぐる世界史—生政治からみた「幸せ」になるためのせめぎ合いとその技法』人文書院、2021など。